

15th
Uchida Clinic 15 Years history



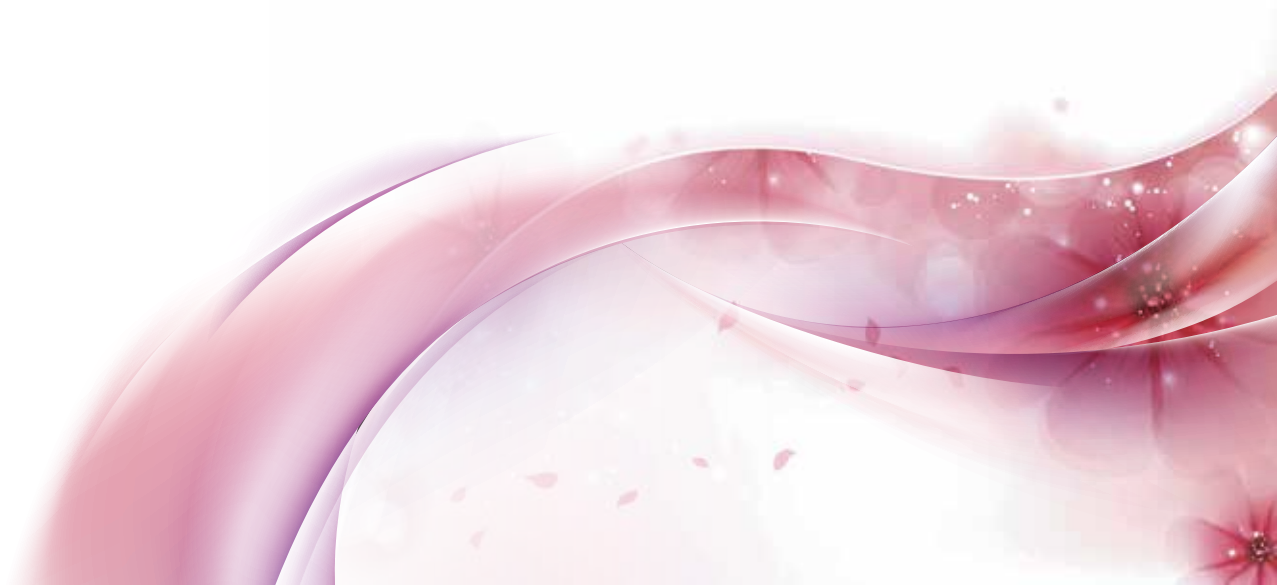
内田クリニック
15周年記念誌



15th 
 Uchida Clinic 15 Years history
内田クリニック
15周年記念誌

contents

内田クリニック 開院15周年を迎えて	2
内田クリニック概要	12
学会発表	14
15年のあゆみ	15
一般不妊治療成績	
1. タイミング療法治療成績	20
2. 人工授精治療成績	21
ART(高度生殖補助医療)治療成績	22



内田クリニック 開院15周年を迎えて

内田クリニック 院長
内田 昭弘



1997年4月に島根県では初めてとなる婦人科(生殖医療)外来専門クリニック(産婦人科医師がお産を取り扱わない開業スタイル)をスタートしてから、あっという間に15年が経過しました。この15年間、大きな問題もなくクリニックの診療を行うことができたのも、私と内田クリニックに関係してくださった多くの方々のおかげと心より感謝しております。本当にありがとうございました。

35歳という若輩者であった私も、今年50歳になりました。精神面、体力面ともに衰えを感じる今日この頃ですが、この記念誌に、私の産婦人科医としての歴史の記憶をさかのぼりながら内田クリニックが15周年を迎えるまでについてを書いてみたいと思います。

1. 産婦人科医のスタート

1986年3月に島根医科大学医学部(現在の島根大学医学部)医学科を卒業し、同年4月に島根医科大学産科婦人科学教室に入局。同期入局者は7名と現在の産婦人科事情からすると、考えられない人数でした。このうち4名は同時に大学院へ進学しました。大学院入試の面接の際に、面接官であった北尾学先生(前島根医科大学産科婦人科学教授)から「何を今後は産婦人科の研究としてやっていきたいのかね?」という質問をされ、同期の他の3名が「産科を中心に」や「婦人科癌について」と答えるなか、私は体外受精などの生殖医療のことを研究としたいと思いながら「人工授精」と答えていました。現在では、当たり前で、患者さんでも間違えることのない人工授精と体外受精を、その当時の私はしっかりと間違えていました。その時、北尾先生は「体外受精のことだな」と答えを修正してくださいました。この時の間違えは今でも鮮明に覚えています。面接の答えとして伝えた「ジコウジュセイ」の答えが今の私、内田クリニックのスタートだったと思っています。

1978年にイギリスで、世界で初めての体外受精児が誕生し、日本では「試験管ベイビー」として取り上げられました。日本では1983年に東北大学で日本初の体外受精児が誕生しました。私が入局した1986年には島根医科大学でも体外受精を行うべく準備をしていましたが、まだ倫理委員会もなく実施はされていない状況でした。ただ、準備は進められており、入局したての何もわからない私もそのメンバーとして動き回っていました。私の役割は、「卵子を探す」「精子を調整する」「培養を管理する」という胚培養士の仕事が基本の業務で、開業後に、胚培養士を

教育する基礎はこの期間の経験が役に立ったと考えています。

体外受精が島根医科大学でできるようになってからも、試行錯誤が続いていました。その当時は、経腔超音波はなく、採卵は腹腔鏡で行う手技でした。GnRHアゴニストもアンタゴニストもなく、患者さんごとに違う排卵のタイミングに合わせての採卵で、夜中でも手術室に入っていたのを思い出します。実際に体外受精が成功するまでには3年の歳月が必要だったと記憶しています。

大学で体外受精の確立させるのに並行して、大学院生として学位のための研究も行っていました。これについては、高橋健太郎先生(現滋賀医科大学教授)と吉野和男先生(吉野産婦人科院長)に直接の厳しい指導をしていただき、学位論文を仕上げることができました。私の研究は精子の機能検査をテーマとしており、現在の仕事につながる研究であったと思っています。

2. 産婦人科医としての基本の研修

大学での研究に加えて、産婦人科医として病棟や外来で基本の業務も毎日行っていました。私の産婦人科医としての基礎は、研修病院であった済生会江津総合病院産婦人科(島根県江津市)での勤務経験の中で確立されたと思っています。

産婦人科部長の故帯刀哲夫先生の下で、研修医時代の1年間と、学位の研究が終わった3年間を江津市で過ごしました。帯刀先生は産婦人科医として婦人科癌から良性婦人科疾患まですべてをこなされる先生でしたが、産科に関しての指導は特に厳しい先生でした。お産に並々ならぬ情熱を注いでいる帯刀先生の下で指導を受けながら過ごしている中で、赤ちゃんが無事生まれて、私がお産室からご家族が待っているところに出ていくと、ご主人もご家族も本当に嬉しそうな顔をしていらっしゃるという場面を何度も経験し、子どもが生まれて家族が増えることの素晴らしさを心から実感できました。帯刀先生の下での産婦人科医としての仕事の「誇り」のようなものも教えていただいた気がしていました。

この研修期間での経験で「不妊で悩んでいる人たちが、望んでもなかなか立ち会うことのできない素晴らしい場面、その場面を迎えることができるように、そういう人たちのために自分ができることをしたい」と強く思うようになり、私の産婦人科医のスタートであった生殖医療への思いをより強くすることになりました。

3. 産婦人科医としての迷いの時期

産婦人科医として7年が経過し、済生会病院での研修を終えて、「生殖医療を仕事の中心に」と思い、意気揚々と大学へ帰っての仕事の日々が1993年から始まりました。大学では、助手として産科婦人科の医局内で中心となって仕事をやるポジションでした。病棟、外来業務に加えて、後輩の指導も行う立場になっていました。外来では不妊・内分泌外来を担当していました。この仕事は、自分も望んだ仕事でした。しかし、大学病院の特性上、生殖医療だけを行うことは許されません。病棟では、お産に立ち会うことは当然ながら、婦人科疾患や婦人癌の患者さんの手術・治療にも主治医として担当し、併せて、後輩の指導も行う毎日になっていました。その時期、同期入局の柳光寛仁先生も大学にはいました。私も彼と同じように病棟では診療にあたっていました。柳光先生は婦人科癌を仕事の中心にしてきた医師でした。同じように癌の患者さんを主治医として治療にあたっても、彼の知識・情報にはかないません。彼にいろいろと多くのことを聞きながら、学び、後輩医師に指導をする日々でした。その時期を過ごす中で、私が主治医として診る患者さんと柳光先生が主治医として診る患者さんでは、同じ産婦人科医師が診ていても何か違うのではないかと感じるようになりました。この思いは、「患者さんに失礼ではないのか」という思いに変わってきていました。この思いが大きくなると、病棟での主治医としての仕事が苦痛になってきました。この時期、当直の日以外は17時には大学から帰宅をするサラリーマン医師に徹していました。(大学の医師としては考えられない生活でした。)当然、自分本来の生殖医療にも力を向けることができず、体外受精の成績も当然、妊娠の結果を出すことはできない時期でした。(その当時の大学では実施件数年間30~40件で、妊娠は1例か2例の状態でした。)

4. 内田クリニック開業に向かった出会い

このままではいけないと分かっていても、なかなか抜け出せるきっかけがありませんでした。しかし、きっかけは思わぬところにありました。大学での生殖医療の成績が出ない中、また、日本でも始まったばかりの顕微授精の技術の研修のために、1996年の春に広島HARTクリニックへ研修に行く機会を得ました。そこで高橋克彦先生(現広島HARTクリニック理事長)の外来を見学させていただきました。現在では日本全国にありますが、その当時としては画期的な、お産を取り扱わない生殖医療専門のクリニックのパイオニアの施設での研修はまさに「目からうろこ」でした。研修中に高橋克彦先生から、日本産科婦人科学会での演題「IVFアットオフィス」の話を知ることができました。システム化されたこの方法なら、患者さんが多くの時間を割かず効率的に不妊治療に取り組むことができることが、話の中で十分に理解することができ、自分はそういうクリニックを目指していこうと強く思いました。この演題の基本は、現在の内田クリニックの基本の考えにも組み込まれています。

もう一つの出会いが、広島ではありました。この出会いは今の私を支える一番の出会いといっても過言ではないものでした。広島HARTクリニックでのアメリカ留学から帰ってこられて間もない向田哲規先生(現広島HARTクリニック院長)との出

会いでした。世界を知っている向田先生の話は非常に刺激的で、生殖医療への思いも素晴らしいものでした。この研修中に教えていただいた顕微授精の技術のコツは早速大学に持って帰り、顕微授精に用いる顕微鏡セットに変更を加えて治療に臨みました。広島研修から帰って、1例目の顕微授精で妊娠が成立したことは、本当に驚きでした。向田先生は、常に世界の学会を飛び回っておられ、その貴重な情報を聞かせていただき、今でも刺激をいただいています。また、中国地方の仲間として、仕事にゴルフにとご一緒させていただいています。

この広島での出会いを経て、一人の人間ができる事には限界があるのだから、産婦人科医といってもすべてのことができるわけではない。不妊治療だけに集中して取り組めば、小さなクリニックでも結果が出せるはずだと確信でき、自分の生殖医療への思いを思い出すことができ、そういうクリニックを目指していこうと強く思いました。

5. 開業への準備スタート

広島研修から帰り、大学での仕事に並行して開業の構想をくみはじめました。妻(内田クリニック副院長内田明子)は松江記念病院での勤務医として仕事と育児に追われていましたが、私の目指す生殖医療と大学での仕事の限界を理解してくれていましたので快く相談にはのってくれました。両親へは松江市での開業の意思を伝えました。当然大学での安定生活と比較しての不安を持っているようでしたが、なんとか開業への理解をえました。(開業資金のない私は、借入れにより資金の調達が必要で、父に保証人になってもらうことが絶対条件でした。借入れと設備のリースに関しては父の力もあり無事に契約ができました。父は当時の仕事を退職後、現在も内田クリニックの事務長として経理を担当してくれています。)

開業のシミュレーションを持ってまず税理士(経営コンサルタントの役割)への相談を行いました。今では当たり前のいわゆるビル開業。その当時は島根にはほとんどなく、ましてや、産婦人科医がお産を取り扱わないスタイルには税理士も難色を示しました。「出産を10件でも行う内容はどうでしょうか?」という提案もありました。しかし、「IVFアットオフィス」の基本である「外来診療で生殖医療に重点を置く、そして、地域の産婦人科施設との連携を持つ」という考えからはお産を取り扱うことはやはりできないとして、税理士を押し切りました。これで、最小限の設備投資とスタッフで開業する構想が決まりました。

次に、開業場所とスタッフ探しが始まりました。医師一人では生殖医療が成り立たないことは、広島HARTクリニックの研修でもわかっていました。とりわけ、胚培養士の役割が大きいことは、広島での研修で理解をして帰っていました。その当時のような職種から胚培養士になれるのかがわかりませんでした。私の高校時代の恩師である島根大学教育学部OBの石倉國男先生から、鳥取大学医学部生命科学科へつながり、学生を紹介していただきました。内田クリニックの初代培養士である宮地利枝(現在は結婚をして半田さんです。4人の子持ちとなった今でも嫁ぎ先である山口県の山下レディースクリニックで、培養士としての仕事を続けています。)と出会いました。面接を行い、すぐに採用を決めました。それが開業前の

1996年5月でした。開業予定の1年前で、まだ開業場所も決まっていなかった状況でした。スタッフが一人決まり、本当に開業しなければならなくなったわけですが、開業場所がなかなか決まりませんでした。そんな時、妻の勤務先である松江記念病院の内藤篤先生(私たち夫婦の出身校である松江南高校と島根医科大学の先輩で、現在松江記念病院理事長)に相談をしたところ、婦人科外来での医師を探しておられたので、記念病院で外来勤務をしながら開業準備をすることの提案をしていただきました。開業準備として体外受精ができる設備(培養器や顕微鏡)を持ち込むことも承諾をしていただき、1996年10月から松江記念病院で一医師として、開業前に生殖医療をする状況を作っていただきました。一人で生殖医療を行う不安はありましたが、開業をスタートする前の準備段階での経験は貴重なものでした。開業場所は12月になってやっと決まりました。これが現在の内田クリニックの場所です。もともとは学習塾が開かれていた1階の一部と2階を改装してスタートすることになりました。それが開業4ヶ月前のことです。なかなか場所が見つかりませんでした。この場所は松江記念病院から500mほどの距離であり、まさに「灯台下暗し」の感覚でした。

6. 母の死と母の力

私が松江記念病院での仕事を始めた同じ時期に、母の病気がみつき、しかも手術ができる状況ではない進行した状態であることがわかりました。父は島根県西部の益田市での仕事をしていたが、退職を早めて松江にもどり、自宅で母の看病をしながら開業の手伝いをしてくれました。私は松江記念病院の協力を得て、母が自宅で生活できるように薬の処方などを行っていました。母には内田クリニックの開業を見る時間がないだろうということは病状からわかっていましたので、工事前の開業場所の確認をしてもらい、出来上がった設計図面や内田クリニックのロゴをみてもらい、開業準備が進んでいる状況を自宅に帰っては毎日のように報告していました。

1996年10月から松江記念病院での診療は、開業準備期間としては非常に有意義でしたが、大学を離れて一人で行う体外受精は、残念ながら妊娠例は1例もなく、試行錯誤の状態が続いていました。1997年4月の開業を決めていましたので、工事開始日も決まり、松江記念病院での体外受精の治療周期もこれで最後となるだろうと思っていた患者さんの採卵を行い、受精を確認し、胚移植の日が決まりました。その胚移植を予定していた日の早朝に病気の母が亡くなりました。私は、自分で母の死亡診断書を書き、予定通りに胚移植を行い、そのあとで葬儀に駆けつけました。

この治療周期が、私が一人で行った体外受精における最初の妊娠成立となったのでした。母が亡くなったのと同じ日に……。偶然かもしれませんが、母が、この仕事を続けてきたことに、そして開業することに大きな力を与えてくれたような気がしました。忘れられない1例目の妊娠成立でした。

7. 開業スタート

改装工事は大きなトラブルもなく進み、最後は追い込みで保健所の検査も受けることができ、1997年4月21日に予定通りに開業することができました。開業時の体制は、院長、事務

長、看護師3名、培養士、受付 計7名でした。

わかっていたこととはいえ、開業してしばらくは患者さんの予約もほとんどなく、開店休業のような状態が続きました。妻には「これは大変なことを始めたかもしれない!」とよく愚痴を漏らしていたのですが、その度に、「ほかの先生たちがやらないことを始めたのだから、必ず患者さんは増えてくるわよ」と慰めてくれました。結構つらい時期だったと記憶しています。

妻の言うとおりに、2年目以降は少しずつですが、確実に患者さんは増えるようになり、「できるだけ治療をしたけれど妊娠できなかった人たちを、何とかしてあげたい。たとえば妊娠できなかったとしても、患者さんが納得して治療を終えることができるクリニックにしたい」という思いをもちながら一生懸命やっていたように思います。その当時、大きな支えだったのが、同じ市内で産科を開院している先輩の渋川敏彦先生(マザリー産科婦人科院長)でした。渋川先生は、「自分は産科をやるから、お前は不妊を診てくれ」と開業前からのアドバイスをしてくださり、「不妊症の患者さんがマザリーへ来院した時に内田クリニックを紹介してくださり、その患者さんが妊娠したらマザリーに戻っていく」という、産科と不妊クリニックの分業と連携の体制、を内田クリニック開業当初から組んでくださいました。現在では多くの産科の先生方が連携を取ってくださるようになっており、内田クリニックもそれにこたえるように努力を怠ることはできないと思っています。

患者さんの増加とともに、スタッフの充実とレベル向上をどのようにしたら図れるかという問題が常に存在していました。しかし、スタッフは「一緒に仕事を続けてくれると思うようになると辞めていく」の繰り返しでした。今では、辞めていくスタッフ、新しく入ってくるスタッフの入れ替えがありながら成長をしているのだと思っています。その中でも、開業3年目から関与してくれている看護師の永島百合子と胚培養士の先久幸の2名の存在は、私にとっては大きな支えでした。永島はそれまでの看護スタッフが退職した後を引きついで仕事が始まりましたが、内田クリニックの看護の力の充実をめざし、自分の判断で6か月間の神戸で単身生活での研修を受けて、島根県で第1号の不妊症看護認定看護師の資格を取ってくれました。現在クリニックでは、外来診療の忙しい中で不妊相談室を担当し、医師には看る事の出来ないところをカバーしてくれています。先久は初代の胚培養士が結婚退職をしたのちに、大学卒業とともに2代目の胚培養士として入職し、私が直接的に指導(現在では到底できませんが)をした胚培養士です。施設見学での研修や学会にも積極的に参加し、島根県で第1号の胚培養士になってくれました。結婚して、現在は2人の子どもの母となっていますが、培養室長として仕事を今も続けてくれています。

この2名以外にも、多くのスタッフが「内田クリニックのスタッフ」として常に「患者さんのために」という思いを持ちながら、一生懸命に仕事をしてきていたと思います。内田クリニックを離れたスタッフもたくさんいますが、そのスタッフにも、そして今も頑張っているスタッフにも本当に感謝しています。ありがとう!

15年の経過の中での私のもう一つの財産は、日本全国の生殖医療を行っている多くの先生方と直接に話ができるようになったことです。多くは向田哲規先生が橋渡しをしてくださ

たわけですが、対象人口20万人という小さな田舎のクリニックの医師が、日本のトップレベルの先生方と直接に現場の本音の話ができるようになったことは大きな財産となっています。学会や論文で情報を得ることはできません。しかし、本音がそこにあるのかというそうではない場合もたくさんあります。オフレコの話を含めて最先端の話が聞けることは、本当に役に立ち、少ない症例数の内田クリニックにおいて現場ですぐに実践できることは、非常に役に立っています。私は趣味としてゴルフを続けていますが、ゴルフでつながりを持つことができた先生も多く、「趣味も役に立つことがある」と感じており、今でも腕を磨いて全国を飛び回っています。このつながりのおかげでスタッフも全国の施設へ研修見学に行けるようになりました。多くの先生方に支えられて15周年を迎えられているのだと感謝するばかりです。

8. 内田クリニック完成形へ

当面の完成形としての目標は、内科の新設と心理カウンセリングの開設でした。この2つをもって内田クリニックの現状の完成形といってもいいのではないかと15周年に思っています。

開業後落ち着いてきたころに、内田クリニックが入っている2階建てのテナントの1階で開業していた皮膚科が移転することになり、25坪のスペースが空くことがわかりました。そのスペースを借りて、2005年6月に妻である内田明子が内科での開業を決断しました。新規の開業ですが、副院長として内科の窓口を増設する形態で始めました。妻は放射線科医であり検査を中心とした診療が基本でしたので、内科診療といっても、健診とか予防接種が主になれば負担少く診療が継続できるという考えもありました。(この段階で、私たち夫婦には3人の子どものおり、医師として、妻として、母としての3役は大変さだと思っています。今では子どもも大きくなりましたが、大変さは変わってないと思います。)内科が加わったことで内科疾患との関与が心配される不妊症例は任せることができ、検査にせよ治療にせよ患者さんの情報を共有して(電子カルテ上)診ることができるようになったことは、非常にメリットを感じていました。今では、HPVワクチンに関しては予防接種として内科外来に全面的に任せることができるようになっています。

不妊診療がベースをつかめるようになり患者さんが増えてくると、不妊症患者さんの心理面のサポートが問題となってきていました。医師は治療を目指すゆえに心理面のサポートは難しいことはわかっていました。(外来の忙しさもあればなおさらです。)心理学のこともカウンセリングのこともほとんど知識がなかったので、看護レベルでも心理面の対応ができる可能性はあると考え、まずは、勉強会を開催しました。そこに講師としてやってきてくれたのが、荒木晃子(立命館大学客員研究員、現内田クリニックカウンセラー)でした。カウンセリングのノウハウをロールプレイも含めて教えていただく講義で、非常に有意義な勉強会でした。カウンセリングを理解すればするほど、看護レベルでの心理面への対応は不可能と思うようになりました。「常勤では無理にせよ、非常勤として松江まで来てもらうことができないか」と声をかけてみようと思ったのが2006年の12月でした。交渉を重ねた後、大阪に住まいの

ある荒木は、内田クリニックのリクエストにこたえ、2007年5月から1か月に2日間のカウンセリングの日をつくってくれました。6年たつ今でも、暑い日も雪の日も大阪から車でやってきてカウンセリングに当たり、時間があるときにはスタッフのカウンセリングにも当たってくれています。私も今ではカウンセリング業務を終えた荒木と夕食をとるようにし、1か月の間の公私にわたるいろいろな話をしながら時間を過ごし、自分も「カウンセリングを受けているな」と感じているところです。

9. 内田クリニックのこれから

平成24年4月1日現在の体制は、婦人科は院長、事務長、看護師6名、培養士4名、看護助手2名、受付係3名 計17名、内科は副院長、看護師2名、医療技士、受付係 計5名で、婦人科と内科を合わせると総勢22名と開業時から考えれば大きな施設になったものです。

私はこれまで、不妊症に真剣に向き合うたくさんのご夫婦を間近で見えてきました。そういったご夫婦に、「子どもが生まれて家族ができるという素晴らしさを何とか体験してほしい。」そう願い、力を注いできたつもりです。

カウンセラーの荒木晃子と何度も話をする中で、生殖医療とは、単に妊娠成立を目指すのではなく、「家族を作っていく手助けをしている」という思いを強く持つようになりました。

不妊治療は今、創成期から安定期を経て、より上を目指していく段階と思っています。その中であって、生殖医療技術は確実に進歩しています。その結果、治療の選択肢も増えてきています。そのように進歩する一方で、どんなに手を尽くしても妊娠できないご夫婦がいるという現実もあります。生殖医療の根本を「家族をつくること」と考えた時、選択肢を「里親、や「養子」という制度まで広げることができれば、「家族が増える喜びを少しでも多くの人に知ってほしい」という私の原点に、さらに幅を持たせることができるのではないかと考えています。

内田クリニックとしては今後、福祉の分野との連携が気軽に行えるようにもっと発信し、「家族をつくる」というご夫妻の思いをかえられるような生殖医療の施設になることを目標として努力をしてきたいと思っています。

10. 終わりに

記憶をたどりながら、長々と私の産婦人科医師としての歴史を内田クリニックの15周年に合わせて書いてみました。

内容は記憶から書いていますので、記憶の間違えもあり、誤った記載もあるかもしれませんが、お許しいただきたいと思っています。

あつという間の15周年。よく頑張ったと自分をほめながらも、「一人では何もできなかったんだ」と書きながら身に沁みるようによく分かりました。繰り返しになりますが、内田クリニックに対してご尽力いただいた皆様にはとても感謝をしています。本当にありがとうございました。

そして、これからもよろしくお願ひいたします。

内田クリニック 開院15周年によせて



副院長
内田 明子

15年前といえば私は、松江記念病院に勤務しており、4歳と2歳の娘二人を院内保育所に預けていつもばたばたしていた頃です。院長も家事、育児の協力をしてくれていたのが、かなり大変だったと思います。

そういう状況も院長に開業を思い立たせるきっかけの一つになったのかもしれませんが。

同じ忙しいのなら自分のやりたい方法で、本当にやりたい仕事をしたいと思ったのでしょう。

島根医科大学附属病院から松江記念病院にうつり、病院の婦人科診療をしながら開院準備をしているのを横目で見ていたような状況でしたので、もう少し協力できていたらよかったかなと、今にしては思います。スタッフの人たちとの協力、連携など、現在の状況を作り上げるまでにはいろいろな事があって試行錯誤を繰り返して来たことと思います。私は今の状況がどうなのかはよくわかってはいませんが、きっといつも、院長だけでなくかかわった皆さんがベストと思う方法を捜し、努力してきてくださったことと思っています。

「気が付いたら15年もたっていた。」でも、15年間大きなトラブルなく診療を続けてきて、常に進化し続ける努力をしてきたことに対して、純粋に「すごいことだな」と尊敬の念を抱いています。

今以上に良いクリニックへの努力を、私たち内科も一緒に目指していかなくてはと思います。

内田クリニック 15周年にあたり



事務長
岩佐 敏男

内田クリニック15周年記念にあたり、開業時からを振り返って見たいと思います。

院長と副院長は、私(旧姓 内田)の長男夫婦です。院長の『開業したい』との強い思いを知り、妻と共に親として何とか叶えさせたいと思う反面、先だつものは開業資金のことです。貯えは無いに等しい状況の中、銀行融資が頼みの綱でした。私が現役であった事も幸いし、銀行融資は可能と判断し早速施設の取得に取りかかり、私達夫婦も休日には婦松し物件の下見や関係先との交渉等も行いました。

現婦人科部分を平成9年1月より賃借し、石原設計事務所の設計管理の基、間工務店によって3月7日より3月末完工を目途に全面改装工事を行い、4月21日に開業することが出来ました。

残念なことに、開業を楽しみにしていた闘病中の妻が、建物の外観と内装設計図を見ただけで、開業の喜びを見届けず、3月6日早朝に他界しました。院長との間でお互いに口には出さなかったが、残念な思いで一杯でした。院長のそれは私の何倍でもあったと察します。

開業時の体制は、院長、事務長、看護師3名、培養士、受付係計7名でした。

開業以来、関係いただいた皆様のご支援とご協力により、お陰様で逐年成長することが出来、平成17年6月には、副院長、看護師2名、医療技師、受付係 計5名体制で内科を併設することが出来ました。

スタッフには各々の立場で多忙の中、専門知識や技術の修得に努め日常業務に貢献していただいています。患者様からのお礼状や近況報告等により、スタッフの対応に感謝されている心情が数多く見受けられ有難いと思っております。

平成24年4月1日現在の体制は
(婦人科)院長、事務長、看護師6名、培養士4名、看護助手2名、受付係3名 計17名

(内 科)副院長、看護師2名、医療技師、受付係 計5名
婦人科のセミナー開催や、相談室の開設等の新しい試みを行っております。

今後、益々信頼されるクリニックに成長することを願っております。

内田クリニック 15周年記念誌寄稿



心理カウンセラー
立命館大学客員研究員
荒木 晃子

ある年の瀬。日本看護協会神戸支部において、不妊症看護認定看護師養成講座の講師を務めた。事前に、大阪のある生殖医療施設を介し、内田クリニックから女性スタッフ一名が講座を聴講するという連絡を受けていた。来講予定の女性はベテラン不妊症認定看護師らしく、どうやら訪問の目的は、講義の聴講ではなく筆者との面会のようなのである。折しも当日は大雪に見舞われ、例のごとく「特急やくも」は積雪の影響で予定より大幅に遅滞。残念ながら彼女は講義に間に合わず面会は叶わなかった。

事情を知らない筆者は、終日の講義を終え、地元神戸で開催中のルミナリエへ能天気には繰り出した。日がな一日電車を乗り継ぎ、ほうほうのていで神戸に到着し発信した筆者携帯への着信コールは、無情にも、雪と光の乱舞に沸く人々の歓声にまぎれ、神戸の夜空に浮かぶルミナリエの幻想に酔いしれる筆者には届かずじまいであった。いま思えば、なんとも申し訳ないことをしたものである。後日届いた郵便物には、その時手渡すはずだった松江銘菓に添えて、クリニックからの熱いラブコールがしたためられていた。私は想い、そして知った。「そうか、あの日彼女は、この“おもい”を直接届けたかったのだ。松江には、この“おもい”を秘めたスタッフ達が勤務するクリニックがある」。

上記が、すれ違いで始まった当院との出会いのエピソードである。大阪の精神科医心理士、また、京都の立命館大学客員研究員としての職位を持つ筆者は、以来、当院の心理士として兼務し、6年の月日が過ぎた。今では、島根の新鮮な海と山の幸、ちょっとシャイで心あたかな人々、そして、当院の可愛いスタッフ達と、当院に通院する患者様たちとの面会を心待ちに、多忙な中松江に通う日々を送る。あの日、筆者へ届いた“おもい”が、今では筆者の原動力である。まったく、人の縁(えにし)とは不思議なものだ。

クリニック開院15周年記念寄稿に向け、この6年間をあらためて振り返り、当院には、「変わらぬもの」の対極に「変わりゆくもの」があることに気づく。当時から、内田院長はじめスタッフが願ひ続ける、「ひとりでも多くの患者様に、新しい命が授かりますように。そして、すべてのご夫婦に、笑顔で暮らす家族の日常が訪れますように」との想いを込めた献身的な医療業務と個々の意識—これが「変わらぬもの」である。そして、「変わりゆくもの」とは、たゆまぬ努力と日々の連携と協働で獲得する、技術力とチームワーク力の向上をいう。さらにもう一点、筆

者が当院の特色と考えるのは、院長以下スタッフは皆、「患者様の意思を尊重した医療を実践したい」と願う人々だという点を記したい。

私にとって、内田クリニックとは、人と人との「縁(えにし)を結ぶ出会いの場」。そこに集う人々が出会い、新たな縁(えにし)へと繋がる拠点でもある。そうやって、内田クリニックの歴史が刻み続けられたに違いない。そして、これからも新たな縁(えにし)が、ここ内田クリニックから、生まれ続けていくだろう。最後に、クリニック開院15周年をお喜び申し上げますとともに、さらなるご発展をここに祈念致します。

開院15周年を迎え思うこと

看護部門・不妊症認定看護師・IVFコーディネーター

永島 百合子

私は、1998年9月より勤務させていただいています。当時看護体制は不十分で、何時代ヘタイムスリップしたのかしら?と 思ったことを思い出します。そこから生殖医療の現場での看護が始まりました。

2004年不妊症看護認定看護師の資格を取得させていただきました。これは院長、クリニックの皆様のご協力と援助のお陰と、たいへん感謝しています。教育課程の半年間は、ハードな日々でしたが、過去の看護を省みることで、自分の成すべき事を見いだせた良い機会となりました。

2011年8月には、不妊相談室を開設させていただきました。日々当事者の方々の心の葛藤を聴く毎日ですが、反対に内面の強さ、優しさにも触れ、私にお手伝いできることは精一杯させていただきます、という思いでいます。

今後は、当事者の方々へより良い医療・社会環境が提供できるように、生殖医療、看護の発展のために、研究活動にも力を入れていきたいと思っています。

開院15周年に思うこと

看護部門・不妊カウンセラー

西村 佳子

開院15周年という節目を迎え思い出す言葉があります。

入職した際に言われた「業務も大変ですが、何よりも患者様を見る事ができる看護師を目指してください。」という師長からの言葉です。生殖医療において「見る」という本当の意味を理解できないまま、初めの数年は看護業務で精一杯でした。幸い入職間もなく、荒木晃子先生を迎え、心理カウンセリングが開設されるのと同時に、心理カウンセリングや対人援助について学ぶ機会を得ました。

院内の不妊カップルへのサポート体制としては、当事者同士の語りの場「グループ・トーク」の開設、昨年2011年からは「不妊相談室」の開設と整備が進みました。

私、個人としては2010年に不妊カウンセラーの資格を取得し、少しは患者様と同じ視線で不妊と向き合えるようになったように思います。まだまだ非力ですが、「患者様を見る事が出来ているのか?今の私に何が出来るのか?」と日々自問しながら歩んでいこうと思います。

15周年にあたって

看護部門・不妊カウンセラー

白根 美倫

内田クリニックに勤務して、4年半になりました。平成23年12月に日本不妊カウンセリング学会の不妊カウンセラーの試験を受け、不妊カウンセラーの資格を取得しました。

内田クリニックのスタッフの一員として、医師、看護師、培養士、心理士、受付、看護助手、他のスタッフと連携を図り、不妊カップルの支援に努めていきたいと思っています。不妊カップルが自律的な意思決定をしていけるように、個々に合わせた情報提供をし、常にカップルの意思を確認しながら対応していきたいと思っています。

15周年の節目

看護部門・情報処理部門

竹内 恵理佳

一昨年から、不妊統計にかかわる仕事に携わっています。開院より現在までの患者様のカルテを見返していく中で、ひしひしと15年の重みを感じることができました。カルテの中には、治療経過だけではなく患者様、院長、スタッフの葛藤、不安、喜び、など様々な気持ちや沢山残されており、院長はじめスタッフ皆が患者様との関わりを大切に日々診療に取り組んできた姿が、一冊一冊のカルテから伝わってきました。

節目に貴重な経験をさせていただき、看護の素晴らしさ、また大変さ、一日一日の積み重ねの重要性、時の重みを再確認いたしました。

微力ながらスタッフとして恥じないよう、患者様との関わりを大切に日々精進してまいります。

15周年の節目に携われたことを皆様に感謝いたします。

15周年にあたって

看護部門

原 香織

開院15周年おめでとうございます。私は、当院にパートとして働かせていただき3年目となりました。

当初は久々の婦人科外来に、そして最新の不妊治療に戸惑いの連続でした。難解な言葉も多く、今も他スタッフの皆さんに助けられてばかりです。

医療現場も日々進歩しています。その中で変わらないもの、それは患者様に対する心と考えます。看護師としてどう関わっていけるのか、一期一会の言葉とともに精進したいと思っています。

看護師への導き

看護部門

山崎 千恵

助手として働き始め、初めて胎児の心拍動を見たときには、鳥肌が立ちとても感動し我が身のように嬉しかったのを覚えています。

その当時は不妊治療に対して全く知識がなく、助手として働く中で不妊治療は「出口の見えないトンネルの中にいるようだ」という患者様の思いを知り、患者様の為に何かできることはないかとの思いが芽生えてきました。

その思いを形にするために、看護への道を目指すことを決意しました。そして看護学校へ進学し、この春無事准看護師の資格を取得することができました。まだ知識は浅く分からないことばかりですが、患者様の思いに寄り添える看護師になれるように日々精進していきたいと思っています。

祝15周年によせて

培養部門・胚培養士・臨床エンブリオロジスト

先久 幸

私が入職したのは、当院が三年目に入ろうとするときです。胚盤胞の躍動感に感動して、この仕事につきました。

院長から言われたことが、「淡々と日々の作業をこなすのではなく、精子、卵子、その先に患者様がいるということを忘れないでほしい。」ということでした。

最初は培養士が患者様とお話する機会はなく、徐々に関わりが増え、いろいろな思いに接して、先にいる患者様の顔を思い浮かべながら、大切な精子、卵子をお預かりさせていただいているという意識をより強く持てるようになりました。

最近、当院で治療をして授かったと言ってもらえる機会が多くあり、その度に嬉しく思いました。培養士がより身近に感じただけけるように、寄り添って、患者様、スタッフ間のコミュニケーションも大切にしていきたいです。スタッフの皆さんにはいろいろな面で助けてもらっています。ここで働かせてもらい、携わらせてもらえることに感謝しています。

開院15周年にあたり

培養部門・臨床エンブリオロジスト・臨床検査技師

森山 弘恵

私は、臨床検査技師として2005年2月から入職しました。当院が不妊治療の専門のクリニックであることも知らず、また、培養士という職がある事も知りませんでした。

培養室の仕事をする事になり、そこで初めて卵子を見た時にはこんな小さい卵が赤ちゃんにと、生命の神秘さを感じ感動したのを覚えています。今は、自身も培養士となり大切な患者様の受精卵を扱うことに緊張の毎日です。良い結果が出た時にはホッとしますが、なかなか良い結果がでない時には何故?と落ち込みます。治療を経て妊娠された時には、あの受精卵が…と感慨深いものがあり、大変やりがいのある仕事だと思っています。

少しでも治療に来られた患者様のお役にたてるよう、これからも知識や技術の習得に励みたいと思っています。

偶然の導き

培養部門・胚培養士・臨床エンブリオロジスト

野々村 佳代

培養士という仕事、また内田クリニックとの出会いは、私が当時在籍していた大学の准教授の元へかかってきた、1本の電話でした。そして培養士として働きかけをくださったのは、私に声をかけてくださった准教授であり、何より、それまで不妊治療が何かを全く知らなかった私を職員として受け入れてくださった内田院長でした。

地元高知を離れ、島根の大学に進学しなければ培養士としての人生にはなりえなかったかもしれません。

1にも2にも学ぶことばかりの日々が過ぎ、培養士として、丸三年が経過しましたが、日進月歩の不妊治療にまだまだ知識も技術も追いつくことができてないように思います。

内田クリニックの開院15周年の節目に際して、さらに向上心を忘れず、培養士としての仕事に邁進していきたいと思っています。

胚培養士という仕事

培養部門・胚培養士・臨床エンブリオロジスト

弓岡 英里

私が内田クリニックで働きだして2年が経ちます。この2年間で参加した学会は10を超え、各地を飛び回り多くの事を学びました。2年間で採卵から胚移植、顕微授精、胚の凍結・融解などたくさんの技術を習得し、今はその技術の上達のため日々邁進しています。そして患者様の卵子や精子一つ一つの生命の大切さを感じ、責任の大きさを感じています。今後は、新しい情報の収集や技術の向上はもちろんのこと、私たちの行っている事を分かりやすく伝え、患者様が少しでも安心して治療にのぞむ事ができればと思っています。胚培養士は技術を施すだけでなく、その道のプロフェッショナルとして情報を発信していく事ができるように努めていきたいです。

15周年、節目の年に思うこと

受付部門

山本 睦子

開院15周年を迎える内田クリニックにおいて、受付として働かせていただくようになり4年が経ちました。当初は不妊治療に関する知識がほとんど無く、きちんとやっていけるのか不安に思う事もありました。

しかし、定期的実施される不妊セミナーや勉強会、日々の業務等を通じて、治療の厳しさや肉体的精神的な負担の大きさを知る事により、患者様の気持ちが多少なりとも理解出来るようになったのではと思います。

受付はクリニックの中で最初と最後に患者様に接する部署です。待ち時間が長くなり待合室がいっぱいの時もありますが、皆さん毎日熱心に通院していらっしゃいます。

そんな患者様に安心して来院し気持ちよくお帰りいただくために、受付としてどう行動すれば良いのかを常に意識し、少しでもお役に立てるように日々努力していきたいと思っています。

15周年を振り返って

受付部門

大村 美沙子

私が内田クリニックのスタッフの一員となったのは平成20年3月でした。

実はその当時内田クリニックが不妊治療に力を入れているところなどはよく認識しておらず、一般的な婦人科だと思っていました。

日々受付業務を行うなかで、不妊治療ならではの事も数多くあり、全く知識の無かった私には新鮮で大変興味深いものになっていきました。また、一般的な医院での業務よりも面白く感じました。勉強会では専門的な治療の内容やその結果も教えて頂けるので大変勉強になります。

クリニックの患者様には私と同年代の方も多く、応援したい気持ちになったり結果が出ると嬉しく思えたりと他にはないやりがいも感じています。節目の年を迎えクリニックの一員としてさらに日々精進していきたいと考えています。

助手の仕事をして

看護部門・看護助手

金山 幸

私は主に内診室で院長先生の補佐をさせていただいています。

患者様と共に一喜一憂しながら超音波の画面を見つめ、命の誕生の奇跡の瞬間に立ち会わせてもらっている訳ですから本当に皆さんに感謝して働かせてもらわなければ罰が当たります。勿論、良い時ばかりではなく悲しい瞬間も幾度となく経験しました。そのたびに何と声をかけたら良いのか、何が私に出来るのだろうと思ひ悩んだ日もありました。

誰もが不安な気持ちを抱えたまま内診室に入って来られます。そんな患者様の気持ちを労わる事のできる助手でありたいと私は思い、内田クリニックのスタッフの一員としてこれからも全力で働かせてもらおうつもりです。

受付・看護助手として

看護部門・看護助手

永島 真弓

平成22年入職し、受付と看護助手に就き、2年経ちました。開院15年のうち、まだ2年しか関わりはありませんが、神秘的な医療、将来の可能性に満ちた医療に少しでも関わっていられると思うと毎日やりがいを感じています。

院内勉強会にも参加させてもらい、難しい用語や薬品、治療について学んでいます。

女性の体の事なので、自分のために学ばせていただいている感覚です。それが患者様に繋げられるように業務に活かしていきたいと思っています。

人と人とのつながりを大切にし、安心して治療を受けていただけるよう、また、通院や待ち時間のわずらわしさ、治療の痛みなどいろいろな負担、束縛から少しでも気持ちが和らぐよう、気配り、共感ができればと日々思い、患者様をお待ちしています。

まだまだ経験が浅く、反省することも多いですが、患者様から信頼されるクリニックの一員となるように自問自答し向上していきたいと思っています。

節目を迎えて

看護部門(内科)・保健師

尾添 葉

入院病棟の看護師、行政の保健師を経て現在こちらで働かせていただき3年半になります。複数の現場での経験を活かして、皆さんの役に立てるよう努力しているところです。特に当院は婦人科内科共に目指すもの、心がけるものがあり、学びの多い日々を過ごしています。スタッフの一人として、患者様の人生の大切な一時期に関わらせていただいていることをいつも貴重に思います。

今後一人でも多くの患者様に信頼していただけるよう気を配り、当院の発展に協力していきたいと思っています。

今、あらためて思うこと

看護部門(内科)

山田 典子

内田クリニックに入職し、早いもので5年が過ぎようとしています。入職した当時は、内科が開業して1年目の年でした。まだ、業務の流れなど試行錯誤している時期でもあり、その当時は戸惑うことや悩む事もありました。ですが、そのたびに先生やまわりのスタッフの方々に励まされ、勇気づけられた事を思い出します。

振り返ると、こうしてこの場に立てていられるのも周りの方々の支えがあったからこそだとあらためて思います。

この機会に、また当時を思い出し、気持ちをあらため、感謝を忘れず日々進歩し続けていけるように努力していきたいと思っています。業務の面では、まだまだ未熟な点もたくさんあると思いますが、患者様に信頼される看護を、この内田クリニックで続けていきたいと思っています。

祝 内田クリニック 婦人科開院15周年

検査部門(内科)・
臨床検査技師(内視鏡技師・健康食品管理士)

松近 信子

内田クリニック婦人科開院15周年、おめでとうございます。私は平成17年6月、内科開院と同時に内科の臨床検査技師、内視鏡技師として職員に加えていただき現在に至っております。

職員になる以前に患者として婦人科を受診した際には、心癒される空間で医療が行われていたのを、よく覚えております。また内科が併設され始めのころは、何もかも手探りで、婦人科内科の連携などミーティングを重ね、今ではすっかり安定した形が確立されました。

医療は日進月歩の世界。まして婦人科の生殖医療は、目覚ましい発展の中でその一端を担っておられます。

今後とも、内田クリニック婦人科・内科が、共に患者様に寄り添い、さらなる歩みを積み重ねていくことができますよう、緑の下の力持ちで頑張っていきたいと思っています。

スタッフの一員として

受付部門(内科)

福頼 佳子

一年を振り返ってみますと、まず松江市の健康診査、それに合わせてがん検診が実施されます。予防接種に関しては、中、高校生を対象にした子宮頸がんワクチン接種、インフルエンザ予防接種が行われます。禁煙外来では、初回につき予約制で行われ、がん地域連携パスにて術後の患者様も来院されます。

内科受診される方においては、年齢、性別を問わず、多種多様なニーズがあり、受付スタッフの一員として、受付業務の内容をしっかりと把握し、専門的知識の向上に努め、その後の医療がスムーズに受けていただけるよう、そして患者様から信頼を得られるように、おひとりおひとりに合わせた誠実な応対を日々心がけております。

内田クリニック概要



名 称	内田クリニック
開設年月日	1997年4月21日
住 所	〒690-0044 島根県松江市浜乃木2丁目6番13号 【婦人科】 患者専用電話(予約含む)(0852)55-2889 TEL:(0852)55-2880 FAX:(0852)55-2890 E-mail:webmaster@uchida-clinic.info 【内科・胃腸科】 TEL:(0852)59-5880 FAX:(0852)59-5890 E-mail:naika@uchida-clinic.info
職 員 数	【婦人科】 医師:1名 不妊看護認定看護師・IVF(体外受精)コーディネーター:1名 看護師:6名(不妊カウンセラー:1名) 看護助手:3名 培養室スタッフ:6名(臨床エンブリオロジスト:4名・臨床検査技師:2名・胚培養士:3名) 心理カウンセラー:1名 受付事務:3名 【内科・胃腸科】 医師:1名 看護師:2名 臨床検査技師(内視鏡技師・健康食品管理士):1名 受付:1名 (2012年12月現在)
診 療 時 間	【婦人科】 完全予約制 月～水・金 9:00～12:30・16:00～18:00 木・土 9:00～12:30 休診日:日曜・祝日 ※水曜午前は不妊相談の初診のみ。注射などの処置については、休診日及び時間外でも実施。 【内科・胃腸科】 月～木 9:00～12:30・16:00～18:00 金 9:00～12:30 土 9:00～15:00 休診日:日曜・祝日 ※禁煙外来、予防接種、胃カメラ、超音波検査は要予約。

内田クリニック沿革

1997年4月	開業
5月	排卵誘発剤使用によるタイミング法 初妊娠確認
8月	配偶者間人工授精 初妊娠確認 体外受精 初妊娠確認 アシステッドハッチング(AHA) 施行開始
10月	初期胚凍結 施行開始
11月	アシステッドハッチング(AHA)施行による 初妊娠確認
1998年6月	顕微授精 初妊娠確認
1999年9月	凍結融解胚移植(顕微授精) 初妊娠確認 胚盤胞移植 施行開始
2000年1月	凍結融解胚移植(体外受精) 初妊娠確認
3月	胚盤胞移植による 初妊娠確認
2002年9月	急速凍結(Vitrification)法(胚盤胞凍結) 施行開始
2003年5月	COOKミニインキュベーター(2台)導入
2004年2月	急速凍結(Vitrification)法(胚盤胞凍結)による 初妊娠確認
5月	第1回・島根生殖医療研究会 開催 『最近のARTとLaboの仕事』 講師 荒木 康久 先生(高度生殖医療技術研究所 所長)
6月	精子特性分析機(SQA-V)導入
7月	精巣内精子による顕微授精 初妊娠確認 凍結融解胚移植(精巣内精子による顕微授精) 初妊娠確認
11月	第2回・島根生殖医療研究会 開催 『生殖医療における看護師の役割』 講師 福田 貴美子 先生(蔵本ウイメンズクリニック)
2005年5月	第3回・島根生殖医療研究会 開催 『胚盤胞移植の意義とガラス化法の臨床応用』 講師 向田 哲規 先生(広島ハートクリニック副院長)
6月	第1回・不妊看護学会山陰地区勉強会 開催 内科開業
2006年3月	第4回・島根生殖医療研究会 開催 『不妊当事者理解に向けての視座』『不妊のところに添って』 講師 荒木 晃子 先生(越田クリニックカウンセラー)
4月	禁煙外来 開始
2007年3月	心理カウンセリング開始
8月	不妊セミナー 開始
2008年3月	バイダス30 導入
5月	婦人科電子カルテ導入
2009年3月	COOKミニインキュベーター(2台)追加導入
2010年2月	精子運動解析装置(SMAS)導入
7月	第5回・島根生殖医療研究会 開催 『家族のそばにある不妊問題』 講師 団 士朗 先生(立命館大学院教授)
2011年8月	不妊相談室 開設
2012年1月	ザイコス導入(レーザーシステム)

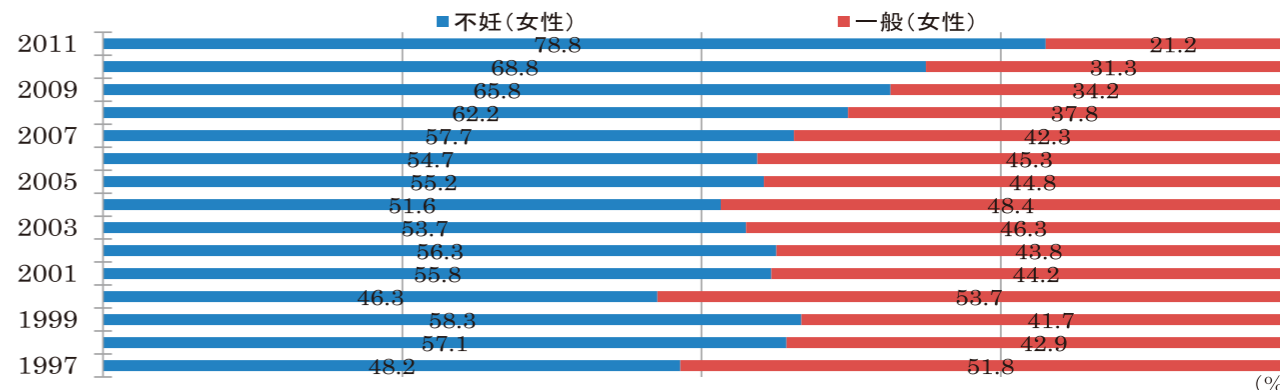
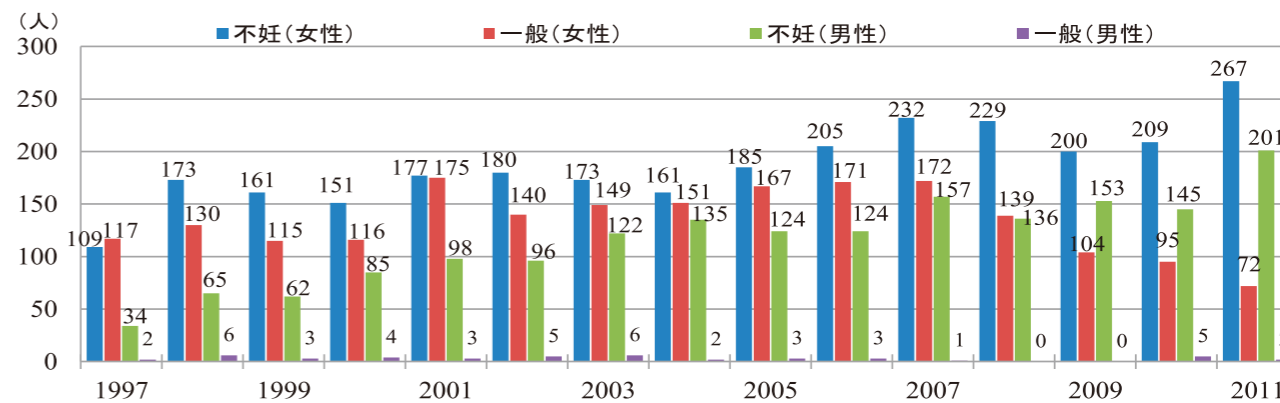
学会発表

2000年11月	第45回・日本不妊学会 体外受精における受精卵の形態と妊娠成否の関連についての検討 ICSI症例における受精卵の形態と妊娠成否の関連についての検討	(発表者) 村尾 明美 安藤(先久)幸
2001年 7月	第19回・日本受精着床学会 配偶者間人工授精における精子調整法と妊娠成否との関連についての検討	村尾 明美
11月	第46回・日本不妊学会 男性因子に対するICSIの有用性についての検討	安藤(先久)幸
2002年10月	第47回・日本不妊学会 不妊症患者とエンブリオロジストの関わりについての検討	安藤(先久)幸
10月	第20回・日本受精着床学会 当院における体外受精反復不成功例に対する胚盤胞移植の現状	内田 昭弘
2003年10月	第48回・日本不妊学会 Day3における胚発育速度および形態学的評価の有用性について 精子調整用試薬 (PercollおよびPureCeption) の精子回収能の比較	安藤(先久)幸 原田 枝美
2004年 9月	第22回・日本受精着床学会 胚盤胞移植における妊娠群と非妊娠群の比較	先久 幸
2005年11月	第50回・日本不妊学会 胚の総合的判断による移植胚選択法の検討 (poster展示) 当院における配偶者間人工授精(AIH)の治療成績 (poster展示)	先久 幸 森山 弘恵
2006年 9月	第24回・日本受精着床学会 Sperm Quality Analyzer(SQA)によるSperm Motility Index(SMI)を用いた ART治療法の選択基準	森山 弘恵
11月	第51回・日本生殖医学会 胚盤胞移植における移植胚の発育状況と成績について (poster発表) 初期胚移植におけるHaloの有無を用いた胚評価の有用性の検討 (poster発表)	内田 昭弘 先久 幸
2007年 1月	第12回・日本臨床エンブリオロジスト学会 精液調整後に人工授精を行うまでの時間についての検討	坂本 ルミ
9月	第25回・日本受精着床学会 培養液の違いによる胚発育状況の検討	坂本 ルミ
11月	第5回・日本生殖看護学会 『不妊看護カウンセリングにおける夫への関わり方の必要性～妊娠が受け入れられず「妊娠人工中絶」を希望した事例の分析から～』	永島百合子
2008年10月	第52回・日本生殖医学会 多胎妊娠の予防についての検討 (poster発表) 凍結前および融解後の胚評価と着床率についての検討	内田 昭弘 森山 弘恵
2009年 1月	第53回・日本生殖医学会 SMASの精液所見からみた人工授精(AIH)における指標の検討 (poster発表) 『生殖医療の現場における看護職と心理職の連携～事例を通し両者の役割と連携のあり方を考える～』	森山 弘恵 永島百合子
6月	第6回・日本生殖医療心理カウンセリング学会 『医療者から心理士へのリファーマポイントに関する一考察～医療環境向上のための連携に向けて～』	永島百合子
11月	第6回・日本不妊カウンセリング学会 『当事者がのぞむ「語りの場」についての検討～患者サポートグループに関するアンケート調査の分析より～』	永島百合子
2010年 6月	第27回・日本受精着床学会 胚盤胞凍結融解胚移植の臨床成績の検討 (poster発表)	先久 幸
11月	第55回・日本生殖医学会 男性年齢と精液所見の関連についての検討—精子運動解析装置(SMAS)を用いて— (poster発表) 当院における配偶者間人工授精(AIH)の臨床成績の検討 (poster発表) 『当事者がのぞむ「語りの場」についての検討～患者サポートグループに関するアンケート調査の分析より～』	森山 弘恵 野々村佳代 永島百合子
2011年 2月	第8回・日本生殖医療心理カウンセリング学会 心理士の「個人・家族・社会」システム介入に向けた支援に関する考察	荒木 晃子
9月	第28回・日本受精着床学会 凍結融解胚移植における不良胚盤胞に対してのAssisted Hatching(AHA)の有用性について (口答発表) Conventional IVF(C-IVF)におけるSQA-V(sperm Quality Analyzer -V)とSMAS(精子運動解析装置)の有用性	森山 弘恵 弓岡 英里
12月	第56回・日本生殖医学会 ホルモン周期による凍結融解胚盤胞移植におけるホルモン値の妊娠率への影響 当院におけるAMH値と臨床成績との関与の検討	内田 昭弘 野々村佳代

15年のあゆみ(1997年4月～2011年12月)

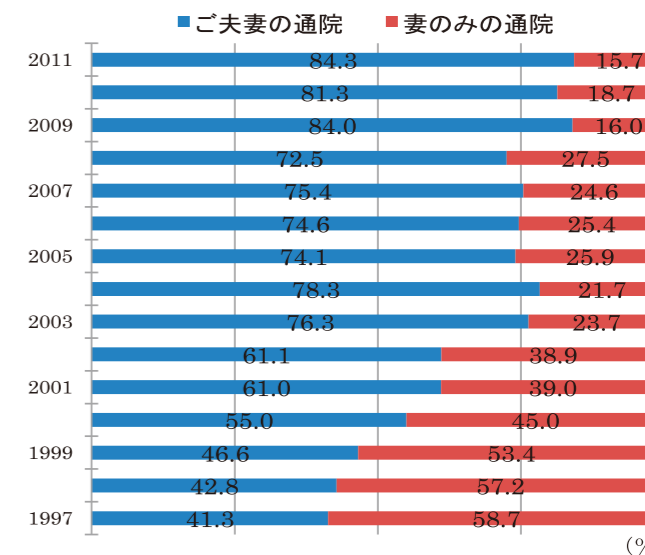
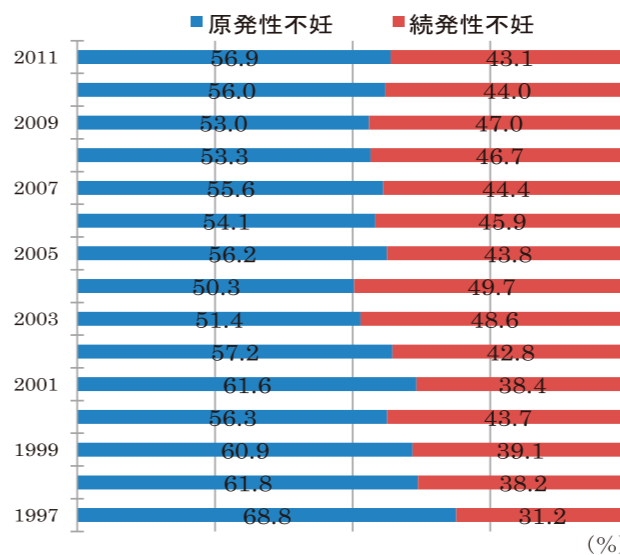
1. 総患者

☒ 総受診者数 6,607人
 ☒ 男性 1,782人(27.0%)【一般 45人・不妊 1,737人】
 ☒ 女性 4,825人(73.0%)【一般 2,013人・不妊 2,812人】

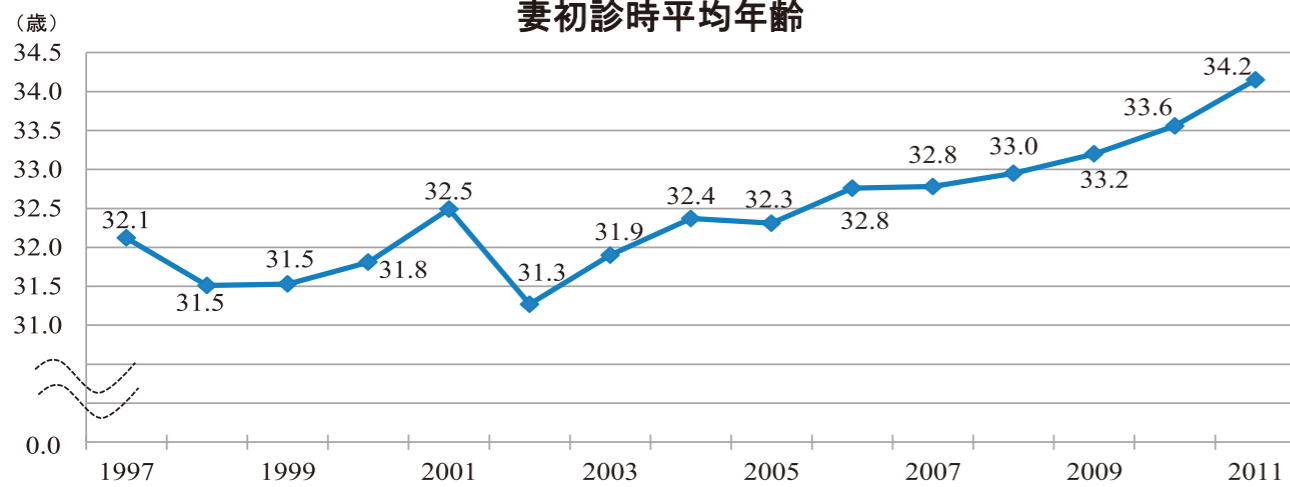


2. 不妊患者

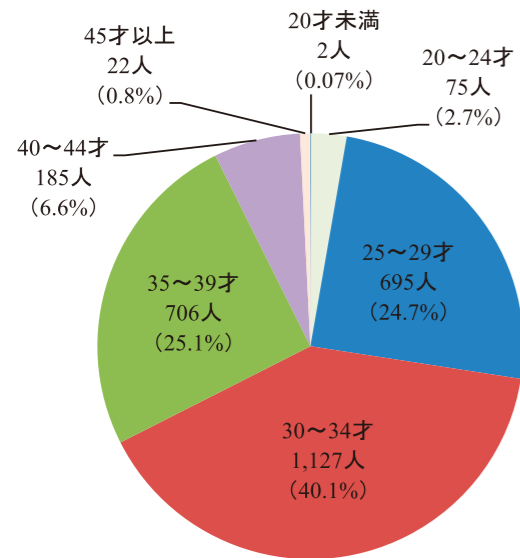
☒ 不妊患者数 2,812人【ご夫婦での通院 1,946組(69.2%)・妻のみの通院866組(30.8%)】
 ☒ 原発性不妊 1,589人(56.5%)・続発性不妊 1,223人(43.5%)
 ☒ 妻平均受診年齢 32.5歳
 ☒ 当院受診までの不妊期間平均 26.5ヵ月(約2年3ヵ月)



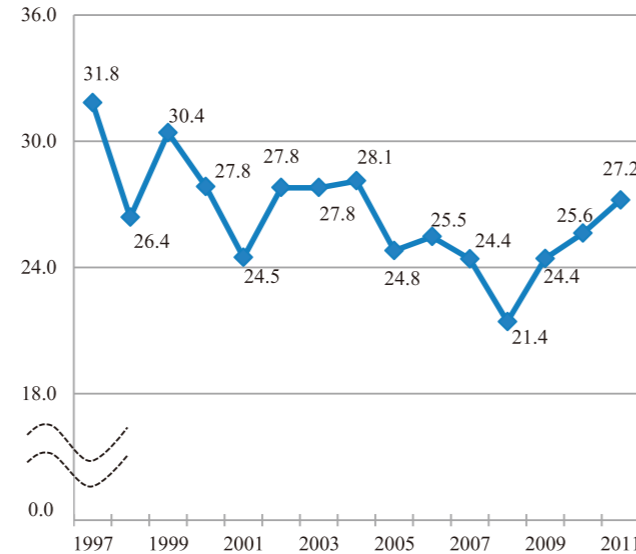
妻初診時平均年齢



妻初診時年齢

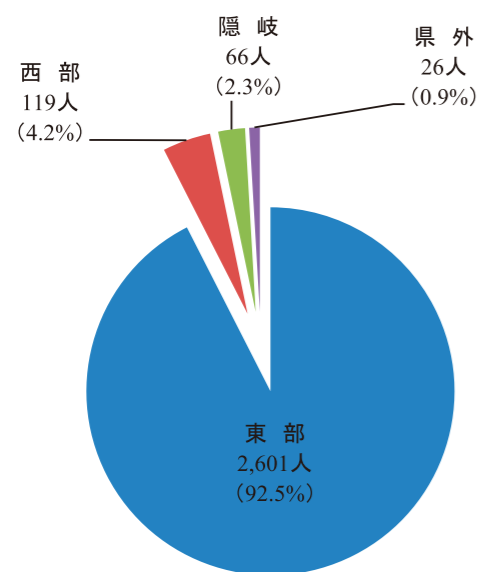


当院初診までの平均不妊期間

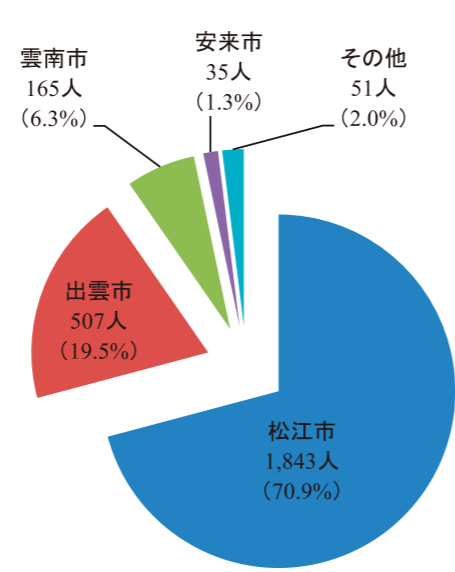


《通院地域》

通院地域



東部通院患者内訳



《検査》

子宮卵管造影検査

施行回数	施行人数	検査までの平均期間
1,456回	1,447人	2.5ヵ月
年平均(97.1回)	年平均(96.5人)	

精液検査

施行回数	施行人数	検査までの平均期間
1,502回	1,214人	3.3ヵ月
年平均(100.1回)	年平均(80.9人)	

《妊娠》

- ☒ 妊娠周期数(延べ) 1,639例
- ☒ 妊娠時平均年齢 32.7歳(最高齢 45歳)
- ☒ 初診から妊娠までの平均期間 9.0ヵ月(最長期間 6年3ヵ月)

妊娠確認

妊娠確認	連絡のみ	単胎	多胎
1,556例	83例	1,376例	180例
(94.9%)	(5.1%)	(88.4%)	(11.6%)

一卵性 6例 (3.4%)

妊娠確認内訳

多胎妊娠内訳

双胎	品胎	要胎
157例 (87.2%)	21例 (11.7%)	2例 (1.1%)

妊娠確認患者(一卵性双胎を含む品胎・要胎あり)

異常妊娠

流産	子宮外	内外同時	胞状奇胎
249例 (15.1%)	13例 (0.8%)	3例 (0.2%)	4例 (0.3%)
人工流産		減胎	
7例 (0.5%)		10例 (0.6%)	

妊娠確認患者

分娩数

確認分娩数	出生児数
1,058例 追跡調査判明患者 (67.4%)	1,181児 死産 (7児) 28日以内死亡 (3児) 追跡調査判明患者

分娩内訳

経腔	帝王切開	不明
700例 (66.1%)	342例 (32.3%)	16例 (1.5%)

追跡調査判明患者

出生児性別

男	女	不明
592児 (50.1%)	564児 (47.8%)	25児 (2.1%)

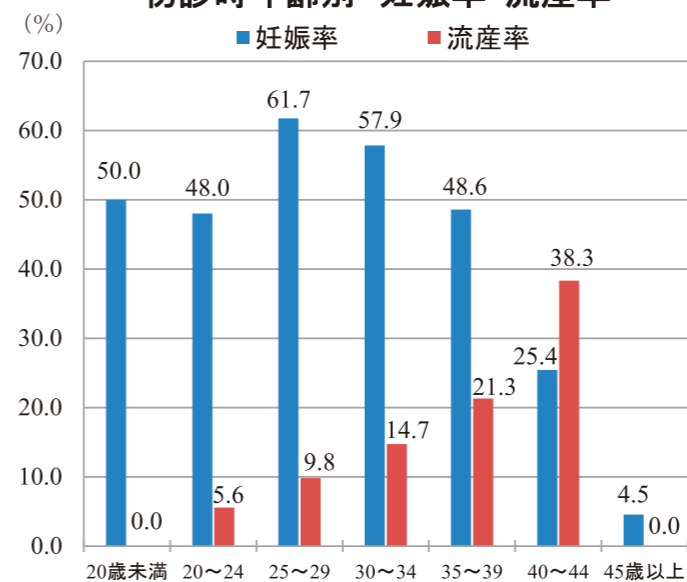
追跡調査判明患者

出生児内訳

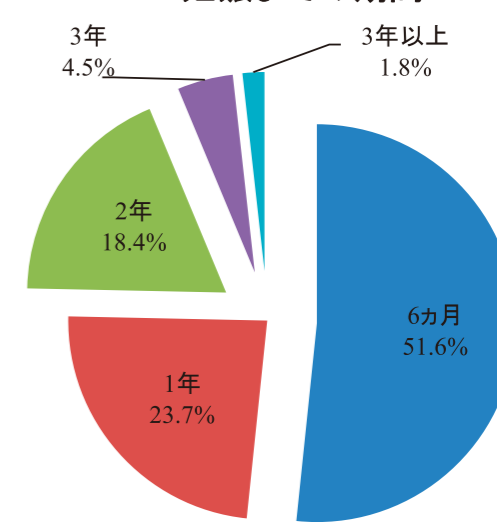
一人	双子	三つ子	四つ子
940例 (88.8%)	108例 (10.2%)	7例 (0.7%)	1例 (0.09%)

追跡調査判明患者

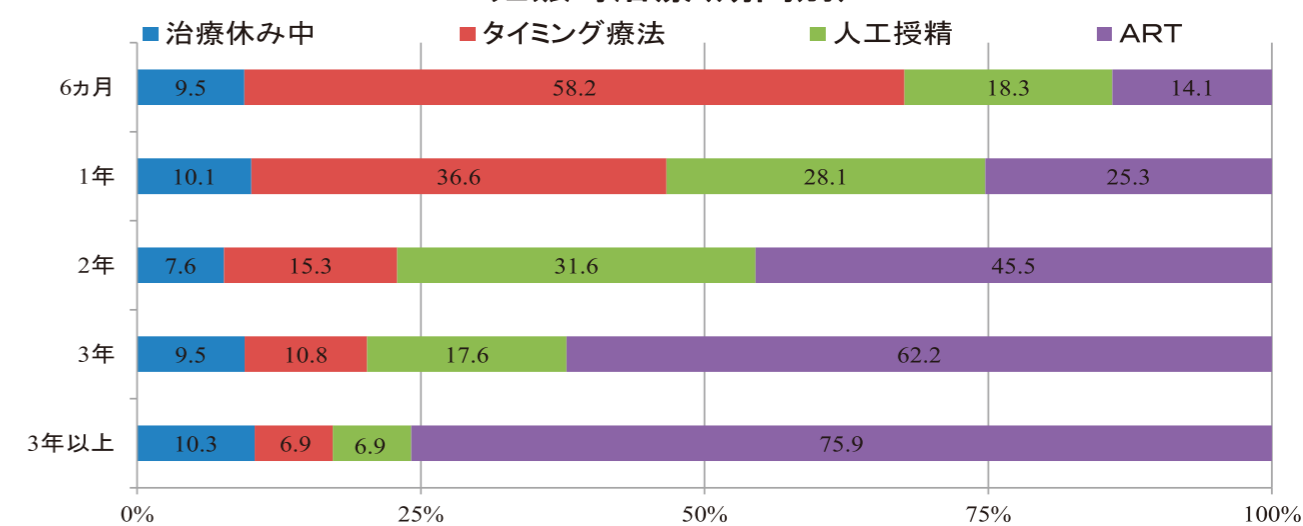
初診時年齢別 妊娠率・流産率



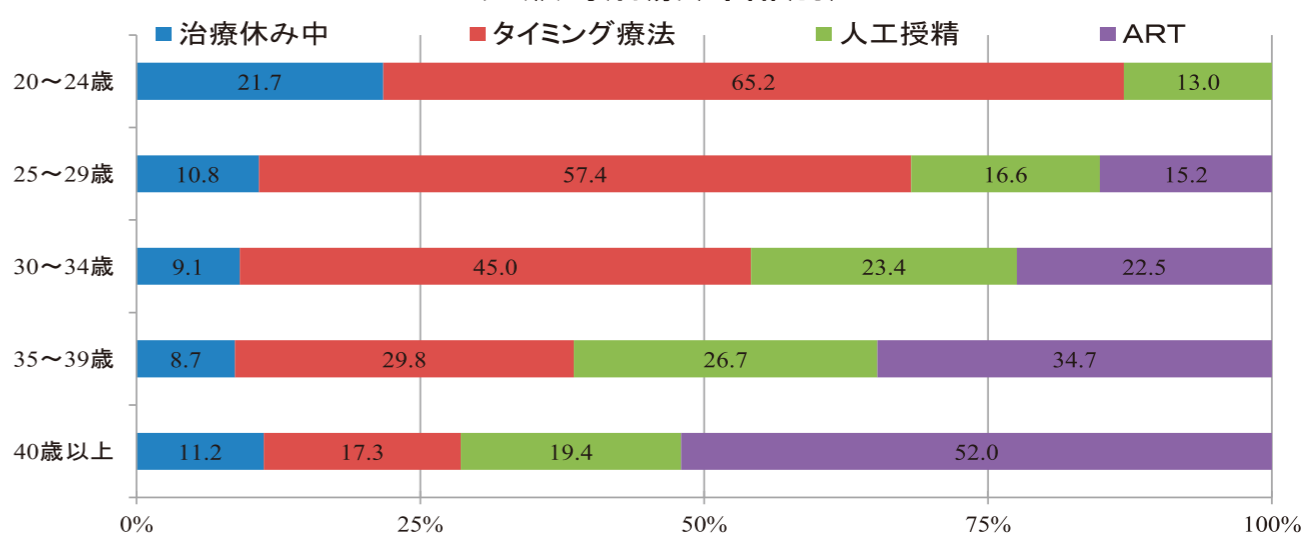
妊娠までの期間



妊娠時治療(期間別)



妊娠時治療(年齢別)

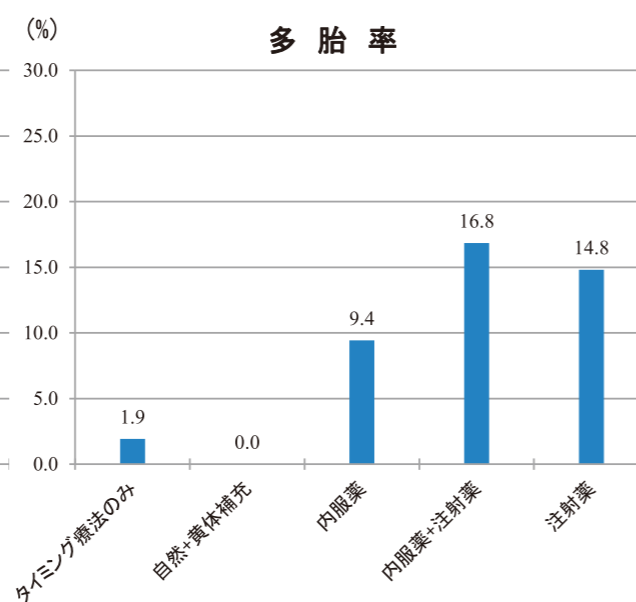
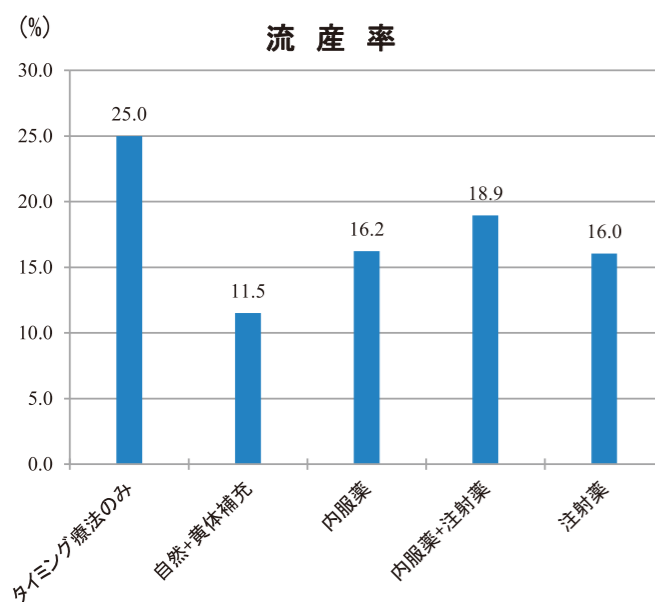
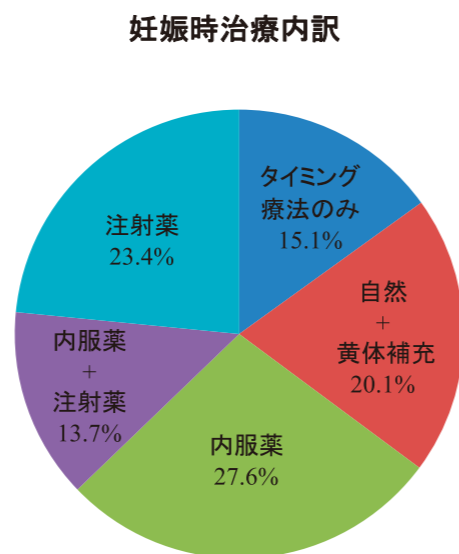
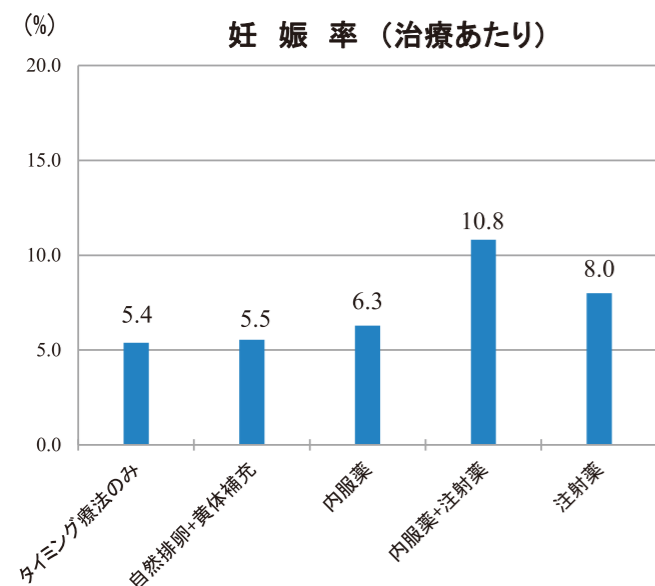


一般不妊治療成績

1. タイミング療法治療成績

自然排卵	内服薬	内服薬+注射薬	注射薬
4,438 周期	3,038 周期	878 周期	2,029 周期

	自然排卵	内服薬	内服薬+注射薬	注射薬
妊娠回数	243	191	95	162
多胎回数	2	18	16	24
流産回数	42	31	18	26

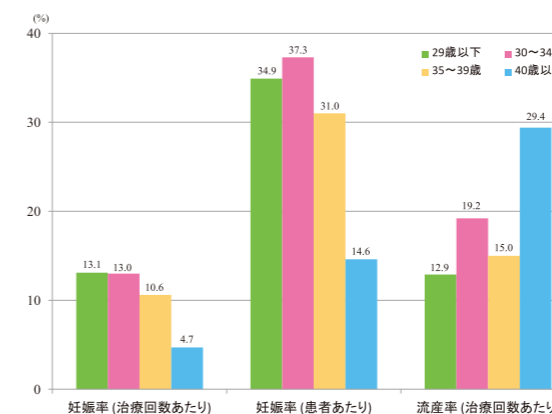


2. 人工授精治療成績

人工授精治療成績のまとめ

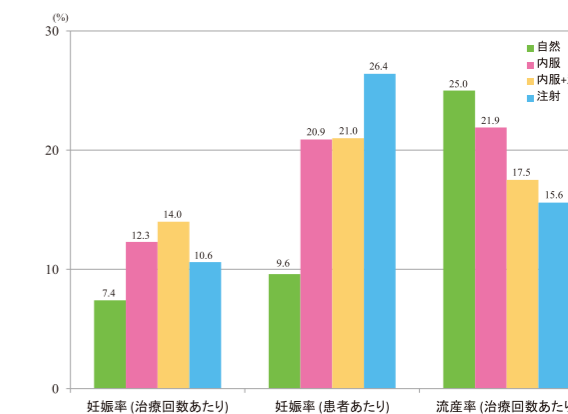
患者数	治療回数	妊娠数	妊娠率		流産数 流産率	多胎数 多胎率
			患者数あたり	治療回数あたり		
987人	3260回	363人 367回	36.8%	11.3%	69回 18.8%	152回 4.2%

年代別治療成績



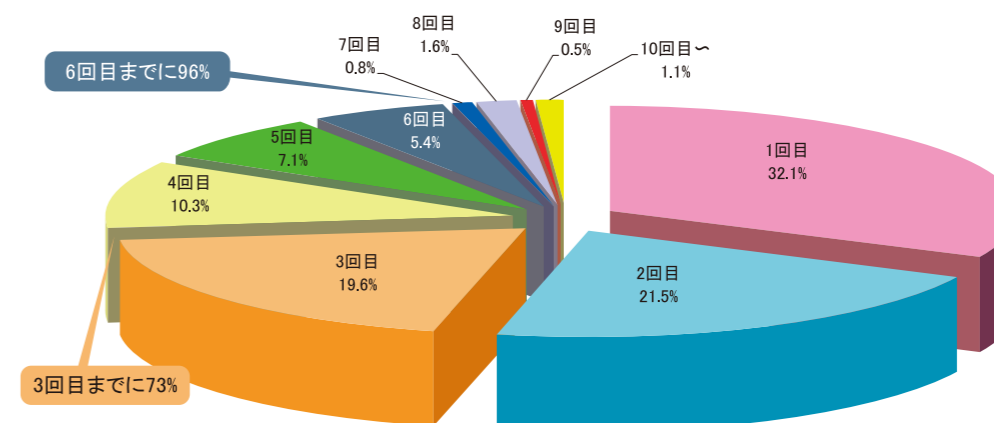
	妊娠率 (治療回数あたり)	妊娠率 (患者あたり)	流産率 (治療回数あたり)
29歳以下	13.1% (62/ 472回)	34.9% (61/175人)	12.9% (8/ 62回)
30~34歳	13.0% (168/1291回)	37.3% (161/432人)	19.2% (32/167回)
35~39歳	10.6% (119/1118回)	31.0% (117/378人)	15.0% (18/120回)
40歳以上	4.7% (18/ 380回)	14.6% (18/123人)	29.4% (5/ 17回)

誘発法別治療成績



	妊娠率 (治療回数あたり)	妊娠率 (患者あたり)	流産率 (治療回数あたり)
自然	7.4% (8/ 108回)	9.6% (8/ 83人)	25.0% (2/ 8回)
内服	12.3% (64/ 522回)	20.9% (62/297人)	21.9% (14/ 64回)
内服+注射	14.0% (56/ 401回)	21.0% (55/264人)	17.5% (10/ 57回)
注射	10.6% (237/2226回)	26.4% (230/871人)	15.6% (37/237回)

妊娠までの治療回数



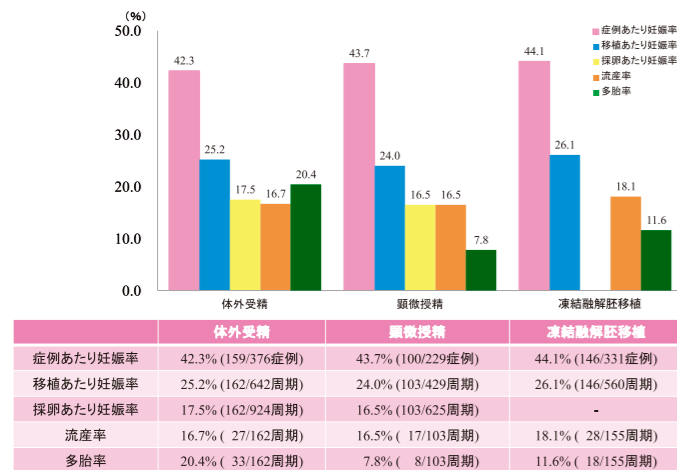
※人工授精で妊娠された患者さんのうち、96%の方が6回までの治療で妊娠しています。

ART(高度生殖補助医療)治療成績

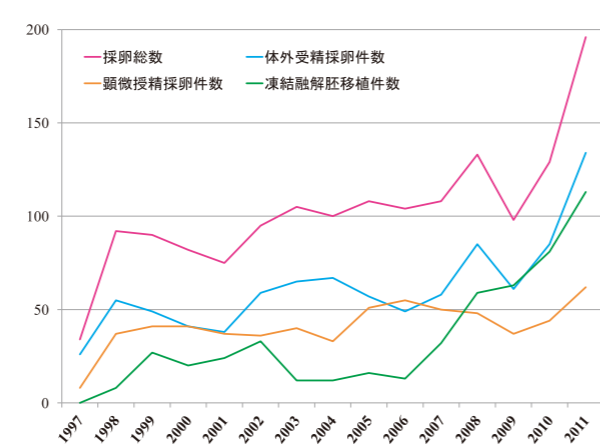
ART治療成績のまとめ

採卵回数	移植回数 (凍結融解胚移植含む)	妊娠数 移植あたり妊娠率 採卵あたり妊娠率	流産数 流産率	多胎妊娠数 多胎妊娠率	生産分娩数 移植あたり生産率 (~2010年12月)	出生児数 (~2010年12月)
1549周期	1577周期	428周期 27.1% 27.6%	82周期 19.2%	59周期 13.8%	309周期 19.6%	362人

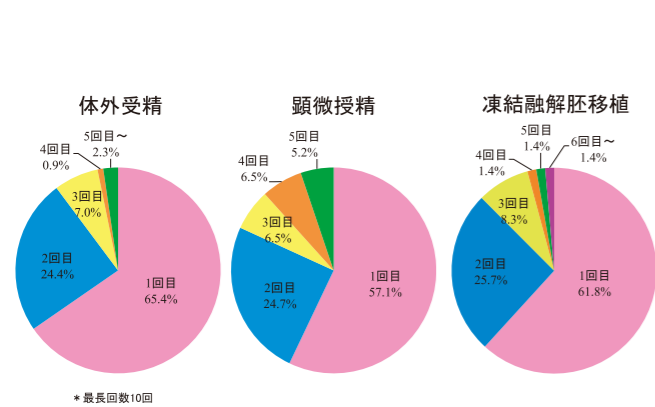
治療法別成績



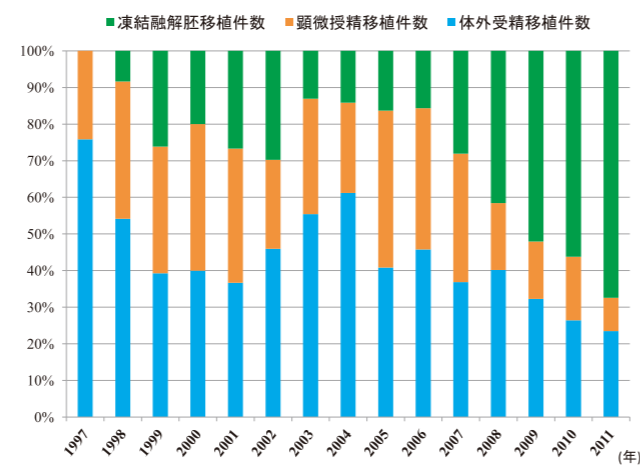
採卵件数及び凍結融解胚移植件数の年別推移



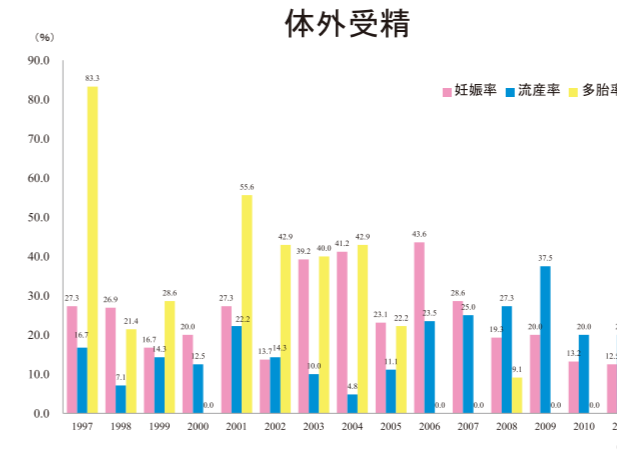
治療法別(妊娠までの治療回数)



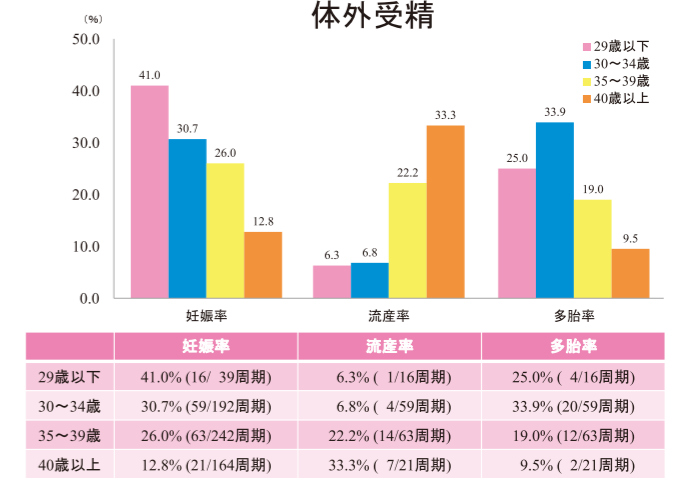
治療法別移植件数の推移



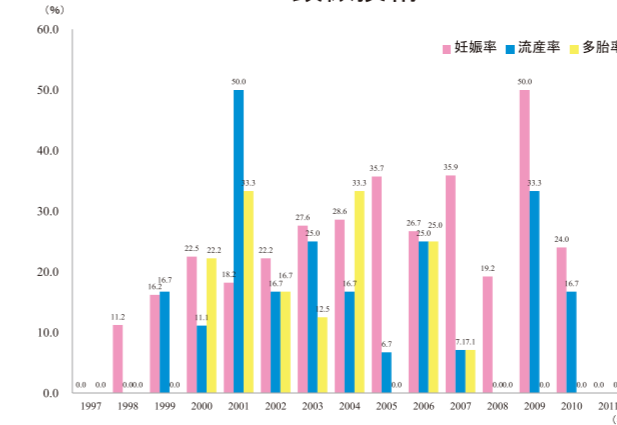
治療法別成績(年次別)



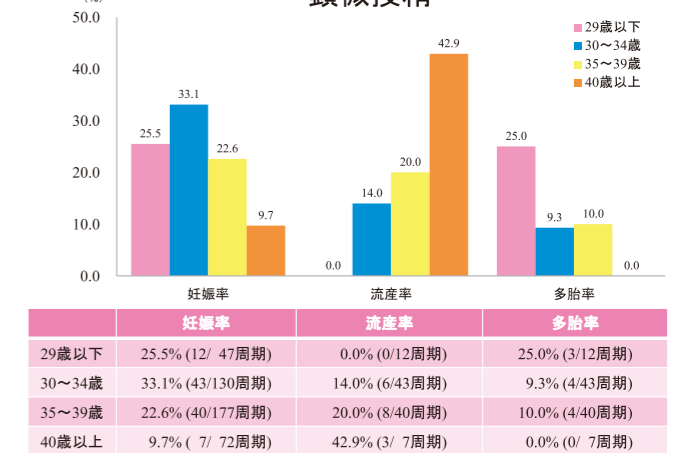
治療法別成績(年齢別)



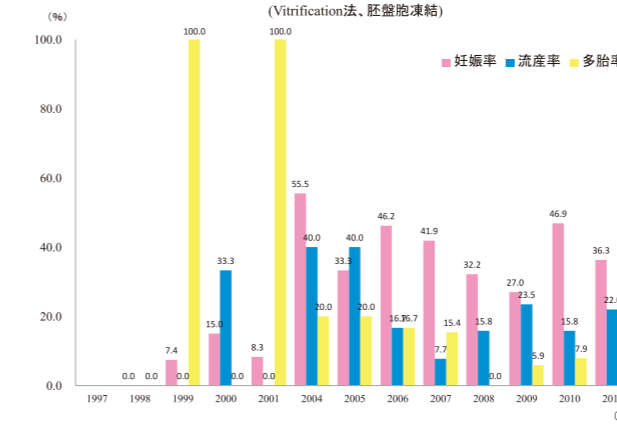
顕微授精



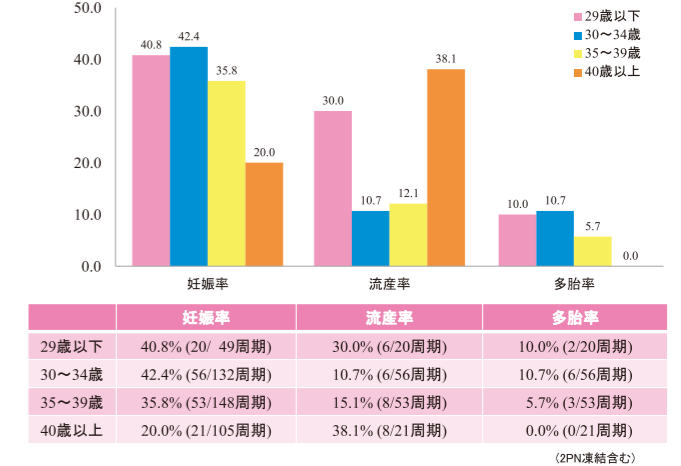
顕微授精

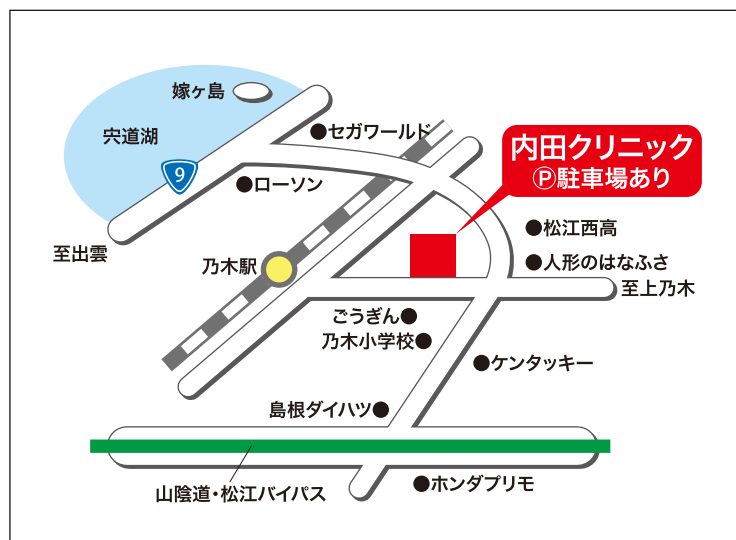


凍結融解胚移植



凍結融解胚移植





編集後記

開院15周年に当たり、記念誌を発行する計画があり「治療データの集計を進めて欲しい」と院長に依頼されたのが約2年前、そこから記念誌発行に向けての作業が始まりました。

今までの治療経過を集計するのは考えている以上に大変な作業でしたが、皆で協力し作り上げることが出来ました。

何分にも初めての記念誌発行のため、開院当初からの歩みが見える写真などもなく、少し寂しいものとなったような気がしますが、日々の業務に追われ限られた時間の中での作業でここまで辿り着けた事を喜んでおります。

これまでご支援を頂いた皆様に心から感謝すると共に引き続きご支援賜りますようお願い致します。

今後も患者様に寄り添い、納得・安心して通院をして頂けるクリニックを目指して発展し続けることを祈念いたします。

(竹内記)

【記念誌編纂委員】

白根 美倫 ・ 先久 幸 ・ 竹内 恵理佳 ・ 西村 佳子 ・ 森山 弘恵 ・ 山本 睦子

15th
Uchida Clinic 15 Years history



内田クリニック
15周年記念誌